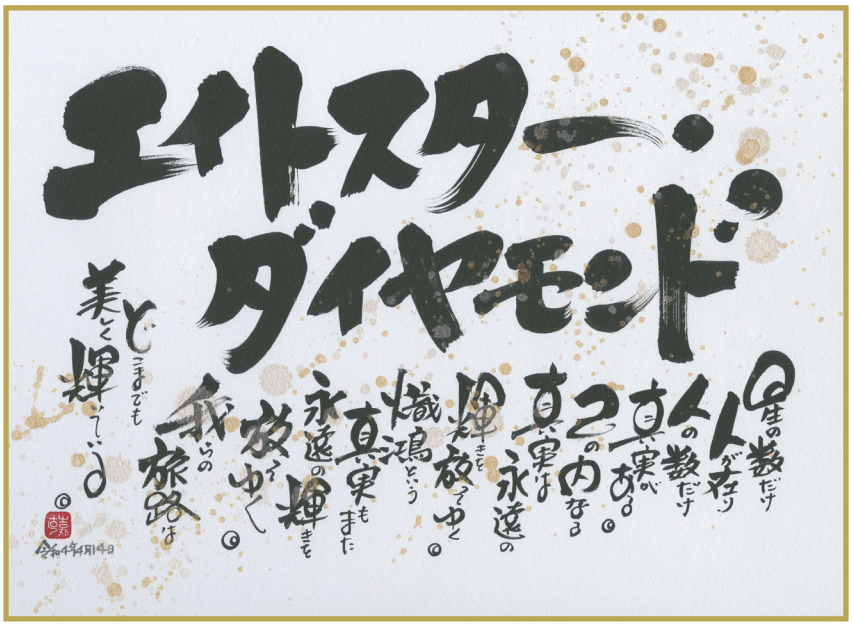
EIGHT STAR
Diamond.jp



西山喜克（よしかつ）氏による
エイトスター・ダイヤモンドの書き下ろし作品
（令和4年4月14日）

目 次

ダイヤモン道（湯川れい子）…… 1
追悼文（山川先生ご夫妻、岡西導明）…… 10
ショールーム/出張スタッフより …… 13
たか・され倶楽部…… 16
有機ゲルマニウム・サプリメント一代記（18）… 19
天夢…… 21
大徳寺先生コンサートのお知らせ…… 23
推薦図書…… 24
天声私語（齋藤慶太）…… 25

Vol. 105
2022. 6. 9

ダイヤモン道

西山喜克（よしかつ）氏による書き下ろし作品（令和4年4月14日）

エイトスター・ダイヤモンド創造者の田村熾鴻（本名：富保）が令和4年4月14日に永眠いたしましたことを改めてここにご報告申し上げます。生前は多くの方々にご支援いただき、学びの道であるダイヤモン道を歩めましたことを心より感謝申し上げます。誌面では、自身の体験に基づく歩みを、有るがまま田村は伝えてまいりました。田村の意志を継ぎ、今後も皆様のお役に立てる情報を発信していけるよう学びを重ねていく所存でございますので、応援いただけますようお願い申し上げます。

田村を偲んで献花いただく時を設けることとなりました。以下の日時で行いますので、優しく微笑む田村の写真に会っていただければ幸いです。

日時：令和4年6月25日（土）、26日（日）
両日共に午前11時～午後4時
場所：スペース天夢（エイトスタービル2階）

※当日は献花のみの予定ですので、平服でのお越しをお願い申し上げます。
誠に勝手ながら香典は辞退させていただきます。

音楽評論家・作詞家　湯川れい子

季節は5月。木々の緑は爽やかに、手入れの行き届いた住宅の垣根やお庭には、薔薇やパンジー、ツツジやサツキの花などが咲き乱れる美しい季節になって参りました。
いかがお過ごしでしょうか？お伺い申し上げます。

エイトスター・ダイヤモンドという、世界に一つしかないダイヤモンドを完成させ、磨き、そのダイヤモンドに人生の全てを託して、ひたすらに信じた「ダイヤモン道」を歩き続けてきた田村富保（本名、トミヤス）氏が、去る2022年4月14日、八重桜の花に送られるように、81歳の誕生日を迎えて程なくして、次の輝かしい世界に旅立って行きました。大変ご心配をおかけしましたことを、深くお詫び申し上げます。

当人は、自分は120歳まで生きる、と公言。エイトスターを身に付けている限り、絶対にコロナには罹らないと言い続けていましたが、ご承知の方もあるように、2月18日に四谷にあるかかりつけの病院でコロナの陽性であることが発覚。自覚症状も熱もないままに、多少呼吸が苦しい程度でしたから、当人は入院する必要などない、と頑張っていましたけれど、息子の田村有宏貴と、田村の甥に当たる山中勝仁の手で、駿河台の日本大学病院に入院しました。

しかしすでに肺炎は進行していて、翌日からは酸素の吸収力が非常に弱いことから、本格的な治療が始まったと聞いております。

もともと喘息で強い薬を常用していたとか、心臓にペースメイカーが入っていると言ったことから、次第に病状は重篤な状態になって、2月26日頃には、緊急病棟に移動。さらにかなり強い圧力で酸素を供給する必要があって、いよいよ集中治療室に入るこ とになりました。

先生からは、心不全の心配もあるということで、果たしてその状態で心臓が持つのか、他の臓器が耐えてくれるのかと、私も息子も毎日ドキドキしていましたが、集中治療室に入っていても、食事の時間になって酸素吸入器を外すと、必ず食事は良く食べて完食をすると聞いて、びっくりしたものでした。お医者さまもとても驚かれて、このままで頑張ってくれれば、また元の病棟に戻れる日が来るかもしれないと言われて、ホッとしたものです。そして遂に3月3日には、集中治療室からコロナ病棟へ。そしてさらに、

しばらくは酸素ボンベが必要だけれど、自力呼吸ができるようにするための筋肉を作るために、リハビリができる隣接した杏雲堂病院に移ることになって、3月17日には息子と婚約者、甥の山中勝仁が喜んで手助けに出かけて行きました。

その日は、鼻に酸素用のチューブを付けている田村でしたが、もうそのまま退院できそうなご機嫌の良さで、田村が大のお気に入りの息子の婚約者であるアイミーが持参した好物のアップル・パイを、もっともっととせがんで食べたり、これも好物のペプシ・コーラをびっくりするほど良く飲んだりしたとのことでした。そして、息子が「家で心配している湯川にも、何かメッセージを言ってよ」と言って差し向けた携帯の画面に、鼻にチューブを入れた田村がニコニコと笑いながら、「今までこんなことを言ったことは無いけど……」と言って残してくれた言葉が、結果的に60年間、聞いたことも無かったような熱い言葉だったのです。この最後になってしまったメッセージは、私の心の中にだけ留めさせて下さい。

でも、それからわずか4日後の3月22日には、突然、意識不明になったとの知らせが病院からあって、すぐに原因は解らなかったのですが、また元の病院の救急外来に運び込まれて受けた検査の結果では、新しくて大きな脳梗塞が首の後ろに起きたためで はないかというご説明でした。これは結果論ですが、リハビリ病院に移すのが早すぎたのか、それともこれもコロナの後遺症による血管の脆さや、血栓のためからだったのか、今となってはもはや誰にも解明はつかない残念な結果ですけれど、その日から息を引き取る4月14日まで、田村は意識不明のままで、荒くて苦しい呼吸を続けながら、なんと22日間も頑張ってくれたのでした。

享年81歳。喘息に始まって、66歳で軽い心筋梗塞、脳梗塞。それからだいぶ経ってからの心臓手術と満身創痍でありながら、「自分は120歳まで生きるのだ」と公言して、そのためのパーティまで開いた人ですから、実に見事と言える、生きることへの飽くなき挑戦であり、見事で壮絶な戦いでもありました。それでも残念ながら田村は帰らぬ人となりましたけれど、もう今日か明日かという状態になった時には、特別に近親者のみというお許しが出て、田村には3回もお別れを言う機会をいただくことが叶いました。最後に会った4月11日。息子が携帯電話に入れていたエルヴィス・プレスリーのヒット曲を耳元で聴かせると、私の単なる思い込みかどうかは解りませんけれど、意識を無くして以来、ずっと宙を見ていた瞳の焦点が、一瞬私の眼と合って、その目元にはうっすらと一粒の涙が滲み出ていました。

音楽療法の現場からも、最後まで聴覚は残ると言われており、もしかしたら田村が大好きだったエルヴィスの声は、田村の脳の奥の海馬という辺りに仕舞われていて、ふっと田村の意識を呼び覚ましてくれたのかも知れません。

それではちょっと話は変わりますが、この辺で、私と田村との出逢い。そして、エイトスター・ダイヤモンドが誕生するまでの話を少しさせて下さい。

田村さんはもともと、10代の頃から喘息の発作に苦しんでいて、私と結婚した1973年は32歳の時。それまでずっと独身でいたのも、喘息の発作が起きることを、自分の結婚の障害になると考えていたのだそうです。

田村富保さん、当時は易学の故高橋秀齊先生から、この名前にすれば結婚できると言って変えていただいた名前が田村駿禮（タカノリ）という、とっても綺麗な名前でした。

まず1972年の夏頃から、ハワイのホノルルにある8,800人が収容できる、当時としては巨大なアリーナ型の施設で、翌年、エルヴィス・プレスリーが報道用の人工衛星を使って、人類初の全世界サテライト生中継によるコンサートを行うという、夢のような話がアメリカから聞こえて来ていました。と思っていたら、突然私の元に、そのコンサートが行われる巨大な会場のH・I・C、ホノルル・インターナショナル・センター（現ニール・S・ブレイスデル・センター）の中に事務所を持つプロモーターのラルフ円福さんという人から、「ここでれい子さんの好きなエルヴィスがコンサートをやることになった。まず1972年11月に、癌救済のためのチャリティーも兼ねて、衛星放送とは関係なく2回のコンサートをやるから、もし来たかったらお客さんを連れて来ませんか？今なら200枚でも、500枚でもチケットが取れるから分けてあげられるよ」と、これまた夢のようなお電話がかかって来たのです。

日系2世のプロモーターの円福さんは、私が最初に渡米した東京オリンピックの1964年から仲の良いお友達でしたから、私は待っていました!!と、ばかりに、当時大の人気テレビ番組だった、大橋巨泉さんの「11PM」という番組のゲストに招かれた時に、「私と一緒にエルヴィスを観にハワイに行きたい人!!」と呼びかけて200名を募集。旅行代理店のソニー・トラベルに依頼して、ツアーを組んでいただいたのでした。

そのテレビ番組を、偶然エルヴィス・ファンの田村さんが見ていて、「自分もどうしてもこのツアーでエルヴィスを観に行きたい!!」と熱望。もう超満員というツアーに、たまたま田村さんが当時はソニーの製品を、セールスマンを使って売る会社「オーディオ＆ビデオ」を成功させて、飛ぶ鳥も落とす勢いの時だったので、ソニー本社の役員を

口説いて、売上の良い20名のセールスマンを年末のボーナス旅行に招待するという形で、私の団体に参加して来たのでした。

そしてエルヴィスのハワイのコンサート会場で田村さんからチケットの御礼を言われた後、帰国して翌1973年の1月14日。いよいよエルヴィスが全世界36ケ国に、サテライト放送で「アロハ・フロム・ハワイ」という、今も人類史上最初で最後の衛星生放送を行なった夜は、私はその放送が即刻LPレコードとして発売されるので、その解説を書くためにテレビの前にデスクを置いて、一言一句聞き逃すまいと孤軍奮闘。感動の涙をこぼすやら、「そんなCMの入れかたはヤメロ〜!!」と怒鳴るやら、生涯に一度しか見られない生放送だと思っていましたから、「え〜!? これで終わっちゃうの？嫌だ嫌だ!!」と泣いたり騒いだり。忙しい一夜を過ごしたものでした。

そうしたらその翌日、思いもかけない田村さんからの「昨夜の放送、もう一度見たいですか?」という電話。

えっ？と、耳を疑って聞いてみると、このほどソニーからテレビ番組を録画できるビデオというものが発売されるのだそうで、まだちょっとお高いけれど、テレビでも映画でも録画して繰り返し何度でも見れるという、これまた夢のようなお話をいただいたのでした。でもさすがにお値段は高くて、2年後の1975年に家庭用に発売されたベータマックスというビデオ機器20万円とちょっとでしたけれど、私が手に入れた1973年は、まだ確か40万円とちょっと。ハワイまでの航空運賃よりも高い買い物でした。それを24回払いのローンにして貰って払い続けて約半年。田村さんに言わせると「ビデオデッキを売ったら、嫁さんも付いて来た」そうですけれど、気がついてみたら、そのデッキと一緒に、いつの間にか田村さんも我が家にやって来て、茶の間ならぬリビングに座っていたという訳です。

なぜこんなお話をするかというと、本当に思えば田村さんとは不思議な縁で、「エルヴィスに会わせてくれるなら結婚してやってもいいよ」と言われて、私が「そんな無茶なことを言われても〜」と青ざめることもなく、ラスヴェガスで結婚式を挙げて、エルヴィスに結婚の誓いの証人としてサインをして貰ったのは、あのハワイからの衛星宇宙放送で放映された「アロハ・フロム・ハワイ」が、私の曲目解説などを載せて発売された途端に日本でも30万枚ほども売れて、レコード会社に造って貰ったゴールドレコードをエルヴィスに届けに行く、という名目がちゃんと立ったからでした。そしてそれよりも何よりも、エルヴィスに会えたラスヴェガスへの新婚旅行でしたけれど、明日はホテルを発つという前の晩、田村さんがとんでもない喘息の発作を起こして、救急車で病院

に運んでもらったものの、私はここで田村さんに死なれるのではないかというほどの大心配をしたものです。

実はそれ以前、私から田村さんにプロポーズしたのは、実はエルヴィスとは一切関係なく、「体をつくるのは食べ物だから、私が栄養管理をして、食事であなたの喘息を治してあげます」と言う、実に大真面目な一大決心だったのです。それで実際にビデオデッキを買った頃から、不規則な食生活で、ラーメンやお肉ばかりを食べている田村さんに、納豆とかオカラとか味噌汁などの献立を週単位で作って、その通りの朝食と夕食を、結婚前も結婚後も出し続けたのが1年半ほど。そのおかげで本当にびっくりするほど発作が減って、メジヘラーと言う吸入剤を使う頻度も減って行っていました。

でも私が田村さんを、「夜店の裸電球」とあだ名をつけて呼んでいたように、癇癪持ちだから喘息が起きるのか、喘息だから癇癪持ちなのか。頑固一徹な上に、昔は本当に気難しい人でした。本来なら甘いはずの新婚当時の朝ご飯の食卓でも、うっかり納豆とお豆腐を塗り箸で出したばかりに、「こんなツルツルすべる箸で飯が食えるか！」と、チャブ台ごとひっくり返されて、びっくりしたことがありました。だからこそなのでしょう、「毎年、表面的なデザインが変わるだけで、中身にはなんの変化もない電化商品を、ネーミングだけ変えて売るのはもう嫌だ」と、スッパリと「オーディオ＆ビデオ」という会社を手放して、社長業を辞めてしまったのは、結婚後ちょうど10年目の1983年のことでした。

私が作詞をしたシャネルズ（のちラッツ＆スターと改名）の「ランナウエイ」が大ヒットした後、息子はまだ7歳で、念願 だったインターナショナル・スクールに入ったばかり。私は次から次に持ち込まれる作詞の仕事で、毎日が寝る時間もないと言うほど、忙しくて大変な時代でした。そんな時に、今度は家でブラブラしていた田村さんが、ダイヤモンドに夢中になると言う、思いもかけない運命と出会ったのです。

或る日のこと、ダイヤモンドのセールをしていらした重富豪さんと言う方が、田村を訪ねて見えて、「ぜひこれを売ってほしい。全世界で売れる商品だと思う」と、鰹節でも削るような 長方形の箱を持って現れたのでした。それはダイヤモンドを入れて上から赤い光を当てると、放射される光の線が黒く見えるファイヤースコープと言う機械で、「ブリリアントカットなんていって最高級の保証をして売っているけれど、どれも全部カットがガシャガシャで、ブリリアントカットの法則どおりのシンメトリーな美しいダイヤモンドなんて一つも無いのが現実です」と言うのです。

ちょうどその箱を覗いている時に私も一緒にいたので、「俺が結婚する時にハワイで買ってやった指輪を見せてみろ」と言われて、それを外して見せると、しばらく覗いていて、「これはひどい!! こんな物に俺は90万円も払ったのか!?」と大変な剣幕で、なぜか私が睨みつけられたのですが、それからというもの、田村はその箱を抱えて、新宿のデパートや銀座の宝飾店に通って、どんな口実で見せて貰ったものか、次から次にダイヤモンドを見せて貰って、遂にはニューヨークへ。 ヘップバーンの映画に出て来たティファニーなどにも行ったと言いますが、あちこちの宝飾店でダイヤを見せて貰っている時に、それで何を見ているのかと聞かれて、「本物のブリリアントカットを探している」と言ったところ、「そんなことをしていたらマフィアに殺されるから、早くニューヨークから出て行け」と忠告されたのだそうです。

そんなこんなで、地球で一番硬い鉱物であるダイヤモンドを、今でもお世話になっているカッターの樋口清さんと出逢って、何十個もの原石を粉にするまで、ああでもないこうでもないと磨き続けること約1年4ヶ月。遂に、ダイヤモンドの贅肉を全て削り取って、入った光が100パーセント反射するエイトスター・ダイヤモンドと言う、ブリリアントカットのダイヤを完成させたのが、1985年10月のことでした。

そして、その光の中に浮き出た船の操舵輪のような、不思議な形の模様を赤と黒の鮮明な写真に撮って、「世界で最も美しく輝くダイヤモンド」という広告を雑誌や新聞に掲載。四谷の今の場所にお店を開店させたのは、2ヶ月後の12月8日だったのです。

そこにひょこひょこひょこと京都から、「お釈迦さまが手に持っておられる“宝輪”の姿が現れたダイヤモンドが、ここにあることを知った。ついてはそのダイヤモンドを、比叡山延暦寺にある天台宗の御本尊で、1,200年前に信長に焼き討ちされていらい、黒焦げになったままの釈迦如来像を新しく私が彫って作るので、その第3の眼に入れたい」と、まさに国宝級のびっくりするお話を持って現れて下さったのが、今は亡き有名な仏師、西村公朝先生でした。

おりしもハリウッドの大女優、シャーリー・マックレーンが書いた「アウト・オン・ア・リム」という本 が、世界中で大ベスト・セラーになって、日本でも400万部も売れたという精神世界の大ブームが起きていた頃で、私も田村もその本を夢中になって読んでいました。そこに今度は私の弟子のような存在で、アメリカの大学に行っていた女の子が、夏休みで日本に帰国。シャーリーの一人娘のサチという女性と大の親友だという話から、シャーリーが「そのダイヤモンドは、自分がずっと探していた賢者の石に違いない。奇跡を呼ぶダイヤモンドだからぜひ見たい！」と言った、などなど、次から次に

目が回るようなシンクロニシティと、地球規模の事件が起き続けてしまうのですが、その話にご興味がある方は、ぜひ田村の著書「地球はダイヤモンド」を、改めて読んでみて下さい。

それで話は随分長くなってしまいましたけれど、田村がエイトスター・ダイヤモンドが持つ力や物語を、自分の「ダイヤモン道」として追求するようになってから、今年で38年。 そのプロセスの中で、バブルが弾けたり、起こってくる様々なシンクロニシティに、私と田村とでは違った意味を感じるようになって、そのことから決定的な事象が起きて田村と別居。離婚したのがおよそ30年前だったのです。

そして最初に書いたように、田村がまた1人になって、私とは古い戦友か親友のように交流するようになってから15年の歳月が経って、今回の今生での別れがあった訳です。

そして4月14日の朝、7時44分。駆けつけた息子たちに見守られて、天高く帰って行った田村でしたが、その日の夕方に、それは良い顔色で、うっすらと微笑みを浮かべたような穏やかな表情で、長男の息子が喪主を務める私の家に帰って来たのでした。今、私が息子と住んでいる世田谷の家は、孫の誕生日やクリスマス、年末のお年越しなど、田村も毎年何回か遊びに来ていたところですが、まさかまさか、こうやって正式に私と息子の元に田村が帰宅して来る日が来るなんて、それこそ考えたこともなかった出来事だったのです。

人生とは、時間が経って見ないと何がどう起きるか解らない不思議な、しかし全ては深い縁に繋がれたものだと、しみじみと感じる今日この頃です。だからこそ、どんな小さなご縁も、疎かにしてはいけないのだと、改めて思います。

今度はその田村の葬儀の日に、また驚くような出来事が起こりました。

今回の葬儀には、田村の両親が入っている田村家の菩提寺ではなく、息子が深いご縁をいただいて、心から尊敬する鹿児島の鎮国寺というお寺から、わざわざ真言宗のご住職、村井宏彰先生と、先生の一番弟子で、今は高野山の奥の院にお仕えしておいでの仁賀善友さんというお坊さまにおいでいただいたのですが、お通夜と葬儀が終わった時、和尚さまの村井先生が、今回の小規模な家族葬に集まった田村家の親族と、エイトスターの従業員など、約24 名ほどの参列者に向き合われて、お話をされようとした、その瞬間。誰も手を合わせていたわけではなかったのに、膝の上に置いていた指輪がキラ

キラキラッと光って、それはもうびっくりするような美しい光景だったのだそうです。日頃から宝石などにはなんの関心も無い和尚さまなのに、「それは誠に美しい光で、眩しいほどに輝いたものだから、本当にびっくりした。あの光は、有名なメディチ家の財宝なども超えるような、世界に輝くダイヤモンドなのではないだろうか？」と、およそ俗世間の宝石やビジネスになど、全く興味もない、ほっそりと枯れた、生仏さまのような村井先生のお口から出たお言葉に、私は口をぽかんと開けたまま、知らないうちに目からは涙がこぼれていました。なぜなら、私も田村と一緒に約2年近く毎日エイトスターを生み出すことに協力して、田村を励まし、エイトスターを世に送り出してからは、これはいつか国際平和にも深く関係して行く、とてつもないエネルギーを持ったダイヤモンドであり、それはそれで大切だとしても、自分磨きと幸せの完成のためには、他人にダウジングなどで選んでもらったりするよりも、自らが選んで身につけるべき物なのではないだろうか？そうしてこそ、広く大きく世界に出て行ける、世界で最も美しく輝く唯一無二のダイヤモンドだと、ひそかに深く信じて生きて来たからでした。

そしてこれからも、田村が生涯信じて疑わなかった、純粋無垢なエネルギーを宿したエイトスター・ダイヤモンドは、皆さまのお力で、世界の空に向かって美しく羽ばたいていくことでしょう。

これからも、エイトスター・ダイヤモンドの中に、田村の魂は住み続けて、皆さまの、そして世界の平安と幸せを祈り続けているに違いないと、私は心から信じております。

ありがとうございました。そして、こらからもどうぞ、エイトスター・ダイヤモンドをよろしくお願い申し上げます。